

# あの遺跡は今！15

## —水辺のくらし—



## 整理調査成果中間報告会について

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会等からの依頼により、県内各地で埋蔵文化財の発掘・整理調査を行っています。発掘調査で得られた情報は、「現地説明会」や「報道発表」などを通じていち早く公表しています。また、滋賀県立安土城考古博物館内の調査整理課では、整理調査の成果についてより深くご理解をいただけるように、整理調査報告会「あの遺跡は今！」シリーズを平成17年度から毎年2回実施しています。「あの遺跡は今！」では、新たな資料や成果を積極的に公開・展示するとともに、出土品に直接触れていただく整理作業体験やオリジナルグッズ等の製作などを行っています。

今回は、メインテーマを『水辺の暮らし』とし、主に琵琶湖や河川などの水辺に営まれた遺跡をとりあげ、出土遺物の展示と関連遺跡の調査報告会を企画いたしました。

この企画が、滋賀の歴史を体感し、文化財への親しみをお持ちいただくきっかけになれば幸いです。

### 平成24年度に調査整理課で整理調査を実施している遺跡

遺 跡 名	所在地	調査原因	主な時代
宇佐山古墳群	大津市	砂防	弥生～平安
粟津湖底遺跡	大津市	琵琶湖総合開発	縄文
六反田遺跡	彦根市	ほ場整備	縄文～平安
北萱遺跡	草津市	琵琶湖総合開発	縄文～江戸
矢橋湖底遺跡	草津市	琵琶湖総合開発	縄文～明治
北山田湖底遺跡	草津市	琵琶湖総合開発	縄文～明治
赤野井湾遺跡	守山市	河川環境整備	弥生～古墳
長命寺湖底遺跡	近江八幡市	琵琶湖総合開発	縄文～明治
岡山城跡	近江八幡市	琵琶湖総合開発	古墳～江戸
蛭子田遺跡	東近江市	インターチェンジ	縄文～平安
多景島遺跡	彦根市	琵琶湖総合開発	奈良～明治
塩津港遺跡	長浜市	河川改修	平安
清滝寺・能仁寺遺跡	米原市	砂防	室町～江戸
上御殿・天神畑遺跡	高島市	河川改修	縄文～室町
針江浜遺跡	高島市	琵琶湖総合開発	弥生
森浜遺跡	高島市	琵琶湖総合開発	古墳

# 関連年表

時代		主な出来事
縄文時代		約 2500 年前 稲作始まる
弥生時代	3 世紀	248 年頃 卑弥呼死す <span>蛭子田遺跡</span>
古墳時代	4 世紀	前方後円墳が各地にさかんに築造される
	5 世紀	仁徳天皇陵が築かれる <span>赤野井湾遺跡</span> <span>森浜遺跡</span>
	6 世紀	群集墳が盛行する <span>蛭子田遺跡</span>
飛鳥時代	7 世紀	603 年 冠位十二階制定
		645 年 大化の改新（乙巳の変） 667 年 近江大津宮へ遷都 <span>六反田遺跡</span>
奈良時代	8 世紀	710 年 平城京へ遷都
		742 年 紫香楽宮の造営
		752 年 東大寺の大仏が完成 794 年 平安京へ遷都 <span>六反田遺跡</span>
平安時代	9 世紀	
	10 世紀	901 年 菅原道真、大宰府へ左遷される
	11 世紀	1008 年 陰陽師、安倍晴明亡くなる
鎌倉時代	12 世紀	1192 年 源頼朝、征夷大将軍となる
	13 世紀	1274 年 元寇 1281 年
室町時代	14 世紀	
	15 世紀	1336 年 室町幕府成立
安土・桃山時代	16 世紀	
	17 世紀	1573 年 足利義昭追放（室町幕府滅亡） 1576 年 安土城完成 1600 年 関ヶ原の戦い <span>膳所城遺跡</span>
江戸時代		



## 古墳時代の川跡と木製品

### えびすだ 蛭子田遺跡（東近江市木村町）

発掘調査では、縄文時代晩期、弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、飛鳥時代～平安時代の遺構や遺物がみつかりました。

#### 縄文時代晩期（約 3000 年～ 2500 年前）

住居跡などの明確な遺構は見つかっていませんが、蛭子田遺跡に人が住み始めたことがうかがえる土器や石器が出土しています。

#### 弥生時代中期（約 2000 年前）

ほうけいしゅうこうぼ  
方形周溝墓が 3 基見つっています。いずれも埋葬する主体部はすでになくなっていましたが、その内の 1 基の溝の中からは供えられた土器（写真 1）が出土しました。

#### 弥生時代後期～古墳時代前期（約 1800 年～ 1700 年前）

この頃になると、蛭子田遺跡に本格的に人が住み始めます。当時の家屋は地面を水平に掘り下げ、その上に屋根をかけた構造のたてあな堅穴住居とよばれるものが主流で、今回の調査では 17 棟みつっています。ほかに、地面に柱を直接据え付けた構造のほったてばしら掘立柱建物も 1 棟みつかりました。建物跡の分布をみると、名神高速道路を中心に半径約 45m の範囲に広がっています。川跡から木製品とともに大量の土器が出土しました。

#### 古墳時代後期（約 1500 年前）

弥生時代後期から古墳時代前期に営まれたムラは、木村古墳群が築かれた古墳時代中期には一時途絶えます。しかし、古墳時代後期になると、ふたたび人が住むようになります。居住形態は同じく堅穴住居や掘立柱建物ですが、数は少なく、堅穴住居は 2 棟しかみつかりません。また、木村古墳群寄りの調査地からは、外周の直径が約 20m の円墳もみつっています。川跡は古墳時代前期の頃とは少し位置や規模が変わっています。



写真 1 方形周溝墓から出土した土器



写真 2 古墳時代後期の土器

### 飛鳥時代～平安時代中期（約 1400 年～ 1000 年前）

古墳時代に流れていた川の大半は埋まってしまっていますが、まだ一帯は湿地のような状態だったようです。周囲には引き続きムラは営まれ、掘立柱建物や布掘り建物（柱を建てる穴を溝状に掘る掘立柱建物の形態 写真3）がみつかっています。平安時代になると、水路が掘削され、耕地化したことがうかがえます。



写真3 飛鳥時代の布掘り建物



写真4 平安時代中期の掘立柱建物

### 古墳時代の川跡と木製品

今回の調査地からは、網の目のように流れる何本もの川跡がみつき、土器とともに、多くの木製品が出土し注目されます。しかし、土器は弥生時代後期から古墳時代前期のものと古墳時代後期のものが混在するように出土し、木製品も同じような状況で出土しているため、時期の特定が困難なものがほとんどです。木製品の種類も、農具や建築部材、容器など多種多様なものがありますが、なかでも木製壺<sup>つぼあぶみ</sup>は、全国的にも出土事例の少ない非常に珍しい遺物です。今回の調査では破片を含めて3点出土しています。

川底付近からは、古墳時代後期のものと考えられる伐採した痕跡のある原木が何本も出土しています。長いものでは5mくらいのものもあり、いずれもカシなどの広葉樹で、製品を作るために伐り出してきたものと考えられます。しかし、出土した木製品には広葉樹を用いたものは少なく、針葉樹で作られた製品が大半です。原木を分割した材もみついていることから、この地は伐採した木を割って出荷するまでの工程を行っていた場所であったと考えられます。網の目のように流れる川は、伐り出した原木を集め、さらに加工したものを流通させるために利用されていたのでしょう。川の存在が蛭子田遺跡を成り立たせていたのです。また今回の調査は、木製品の製作が分業体制によって行われていたことを示すきわめて貴重な発見といえます。

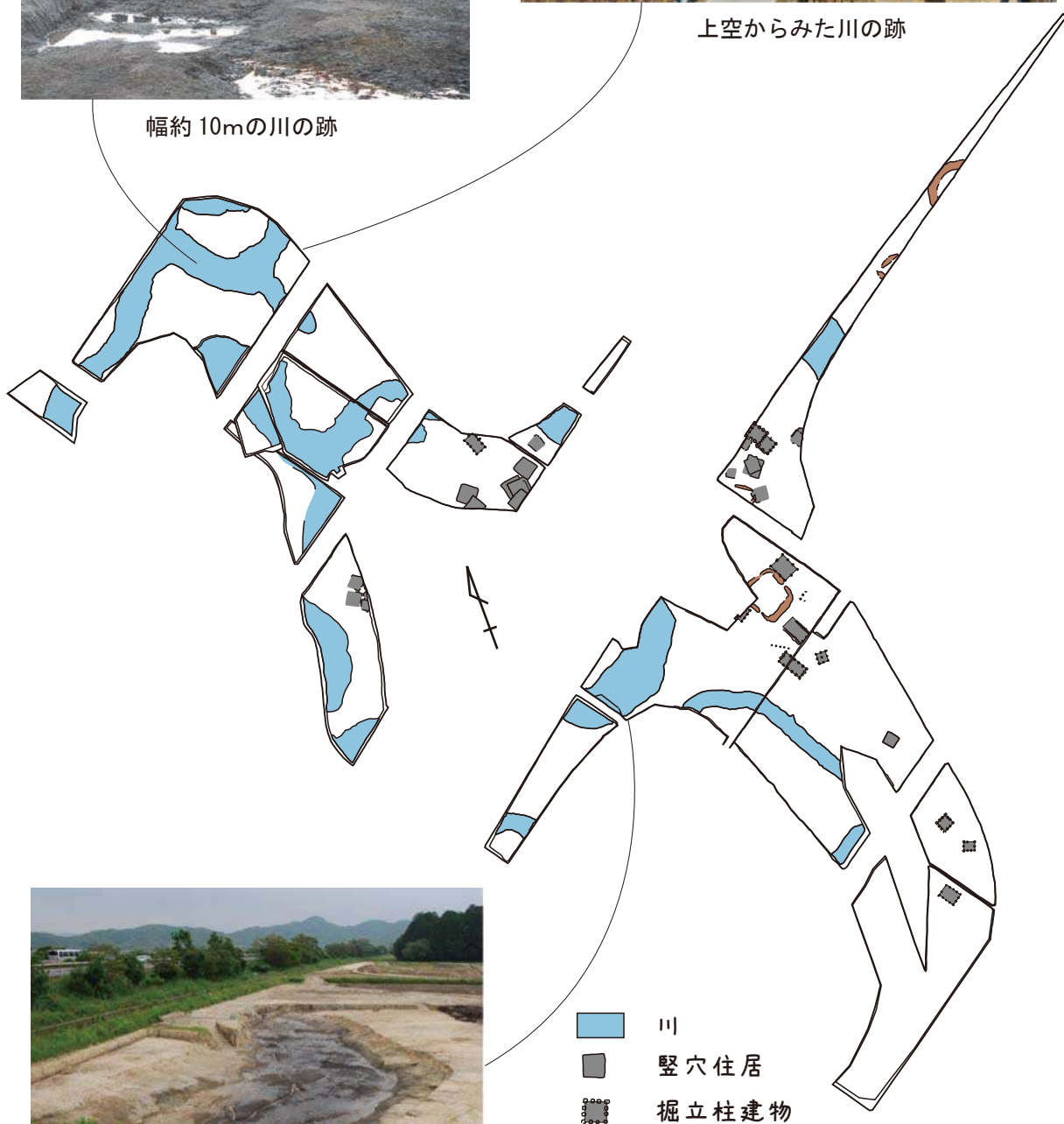
### 主な遺構



幅約10mの川の跡



上空からみた川の跡



掘り終えた川の跡

## さまざまな木製品



伐採痕のある原木



伐採した痕跡



高床建物の柱



鉄の斧



つぼあふみ  
木製壺鍙



高床建物の部材 (台輪)  
だいわ



用途不明の木製品



まげもの  
ひっくり返った曲物容器



何かの台



そう  
槽



臼



# 湖城—膳所城の実態を探る!

## 膳所城遺跡 (大津市丸の内町)

**概要** 今回の発掘調査は、近江大橋有料道路建設工事（西詰交差点）にともない、道路幅を広げる部分が膳所城遺跡の範囲内に含まれるために、平成24年4月～5月に実施しました。調査の結果、いままで具体像がよくわからなかった膳所城—なかでも北の丸の様相を知るうえで重要な手がかりが得られました。なお、本格的な整理調査を実施していないため、以下の見解は今後変更する可能性があります。ここで調査結果の概要を速報します。

**膳所城** 関ヶ原合戦の後、慶長6年（1601）、徳川家康は西国大名への抑えのため、関ヶ原合戦で落城した大津城から、新たに膳所崎（現大津市本丸町・丸の内町）に城郭を天下普請の第一号として築城しました。これが膳所城です。膳所城には、三河以来の家康の家臣である戸田一西（かずあき）が入封し、膳所藩主（三万石）になりました。その後、本多氏→菅沼氏→石川氏（七万石）と城主は移り変わりましたが、慶安4年（1651）に再び本多氏が入封し（六万石）、明治4年（1871）の廃城まで膳所藩政の中核施設として機能していました。

廃城後、天守などの主要施設は解体・移築されました。城域を画した石垣も琵琶湖疏水工事や東海道線建設工事等に石材が転用されました。戦後には、湖岸道路等の建設によって湖岸部が埋め立てられたため、公園となった本丸跡を除くと、膳所

城の遺構は現在ほとんど残っていません。発掘調査についても、本丸跡での数次にわたる調査等以外にほとんど実施されておらず、その実態は十分にわかっていませんでした。

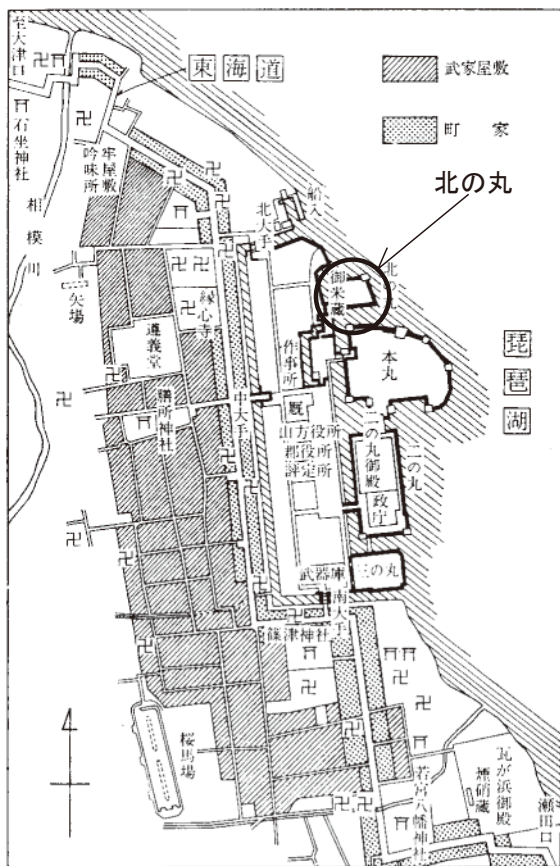


写真1 現在の膳所城跡（近江大橋から）

現在、本丸跡が膳所公園として整備され、湖にうかぶ「湖城」の面影をしのぶことができる。

図1 膳所城と城下町（拠『新修大津市史第4巻』）

各種の絵図をもとに想定復原されたもの。今回の調査地が含まれる北の丸を図示している。





写真2 調査地の場所（北から）

**調査の概要** 今回の発掘調査では、膳所城北の丸が推定される範囲内（写真2の黒太破線）に3か所の調査区（写真2の黒塗り部分:調査区1～3）を設定しました（写真2）。それぞれの調査区では、膳所城北の丸に関する遺構を検出したほか、膳所城に伴うさまざまな遺物が出土しました。以下、それらの内容について簡単に紹介します。



**北の丸北端部を検出** 調査区1では、北の丸北端部を検出しました（写真3）。写真3では、南側（写真奥側）の北の丸内部の地面が、調査区の北側で約1.3～1.5mほど垂直に落ち込み、段差となっている状況がわかります。さらに、段差の北側は近代期の遺物を含む砂層が厚く堆積していました。この砂層は、湖岸道路等を埋め立てるさいの盛土と考えられます。

もともと、北の丸は石垣によって囲まれていたのですが、今回の調査では、明確な石垣を確認することができませんでした。ただ、段差付近には石垣の裏込めに用いられたと目される小石材がみとめられたので、石垣を検出できなかったのは、さきに述べたように、廃城後石垣の石材を転用するために除去されたからだと考えています。

写真3 北の丸北端部（北から）

**北の丸内部の様子** 北の丸には、膳所藩の米蔵があったとされています。しかし、いままで発掘調査がなされていなかったため、内部の具体的な様子はわかりませんでした。今回、調査区 2・3 で石組溝 2 条を検出しました（写真 4）。東側石組溝は幅約 1～1.5m で、溝内の埋め土内からは、多くの陶磁器類・土器類・瓦類とともに海産貝類の貝殻等が出土しました。陶磁器類の時期は 17 世紀前葉頃が中心です。西側石組溝は幅 0.3m 程度と小規模でした。東側溝は北の丸内を区画する排水路、西側溝は建物の雨落ち溝の可能性がります。



写真 4 北の丸内部で見つかった石組溝  
(調査区 3：北から)



写真 5 新たに見つかった石垣 (調査区 3：南東から)

**新たに見つかった石垣** 調査区 3 では、新たに石垣を検出しました。この石垣は上下 2 段あり、上段の石垣はおおむね東西方向にのびます。一方、下段の石垣は、西半では上段の石垣と同様に東西方向ですが、途中でほぼ直角に折れ曲がり、南側へのびています。上段の石垣は、西端部で 3 段が遺存していましたが、東半部は石材の抜け落ちた部分が多く、遺存する石材も本来の位置から移動しています。下段の石垣は、基底石のみが遺存するもので、上段石垣よりもさらに遺存状態がよくありませんでした。これらの石垣は、少なくとも近世段階に埋められたようです。

北の丸の南端部については、本丸跡（膳所公園）側にある現状の石垣が相当すると考えられるのですが、今回の調査によって、新たにその北側でこれらの石垣が見つかったことから、北の丸内の区割りがある段階に変化した可能性がでてくることとなります。

**出土遺物** 調査区 1～3 において、多数の遺物が出土しました。これらは、現在未整理であるため、概要を示すことにします。

**【瓦類】** 出土遺物の大半を占めるのが瓦類です。丸瓦・平瓦・棧瓦・軒瓦があります。軒丸瓦の多くは巴紋軒丸瓦ですが、そのなかに本多家の家紋である立葵（図 2）を施した例（写真 7）がありました。

**【土器・陶磁器類】** 東側石組溝内からまとめて陶磁器・土器類等が出土しました。

**【貝殻】** 同じく東側石組溝内からは、海産貝類（ハマグリか）の貝殻がまとめて出土しています。



図 2 本多家の家紋—立葵



写真 6 東側の石組溝から出土した陶磁器類  
大半は 17 世紀前葉頃のものです。



写真 7 出土した立葵紋軒丸瓦

**まとめ** 今回の調査は、膳所城北の丸における最初の本格的な発掘調査となりました。その結果の概要については、先に述べたとおりですが、それらは以下のようにまとめることができます。

- ①北の丸の北端部を確認し、北の丸の規模（南北）を推測する手がかりがえられました。
- ②北の丸内において、区画溝（東側の石組溝）や、建物にともなうと目される雨落ち溝（西側の石組溝）を検出し、北の丸内の建物配置や区割り等の具体的様相をしるうえでの手がかりがえられました。
- ③当初想定していた北の丸南端よりも内側で新たに石垣を検出したことから、北の丸内の区割り、あるいは北の丸本体の規模がある段階に変化した可能性が見いだされました。
- ④石組溝内からまとまった遺物が出土したことで、北の丸内の建物等の構造や時期、さらには北の丸内での活動を推測する手がかりがえられました。

今後、整理調査を進めるなかで、①～④を手がかりとして、さらに分析を進め、膳所城の具体像をあきらかにしていきたいと考えています。



# 古代の火おこしセット発見

## もりはま 森浜遺跡（高島市新旭町旭）

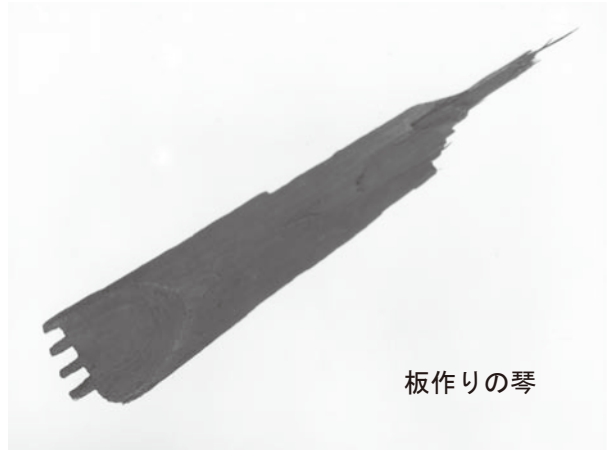
森浜遺跡は、高島市新旭町旭の湖岸沿いにある遺跡です。発掘調査は、昭和 52 年～ 53 年にかけて実施し、調査の結果、水面下約 0.7m～3 m の湖底から古墳時代初め頃を中心とした時期の遺物が出土しています。その中でも木製品がたくさん出土し、農具である田下駄や鍬、鋤、火おこしの道具である火鑽杵ひきりぎねと火鑽臼ひきりうす、楽器の琴板、琴柱などが出土しています。

田下駄は、人間が履く足板の部分と木を輪状に撓めた輪かん状の部分が揃って発見されました。琴は 3 点見つかり、1 点は板作り、後の 2 点は槽作りそうの琴です。板作りの琴は平面三角形をしたもので、そのまま演奏できますが土器や箱など空洞のものに端をあてると大きく響きます。槽作りの琴は長方形をした板で、下に断面コ字状の共鳴箱を取り付けて演奏します。

琴は、楽器であると同時に神の声を聞く祭祀の道具でもあります。『日本書紀』には、仲哀天皇が新羅を攻めるべきかを神に問うたときに琴が使われました。また、古墳から琴を抱いた埴輪が出土しているように、琴は広く祭りの場面で使用されていました。

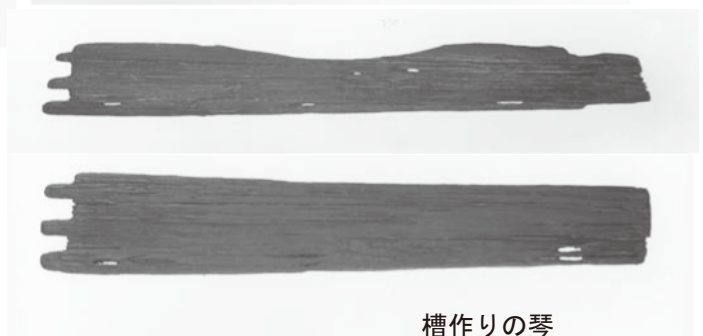


田下駄



板作りの琴

出土した田下駄と琴

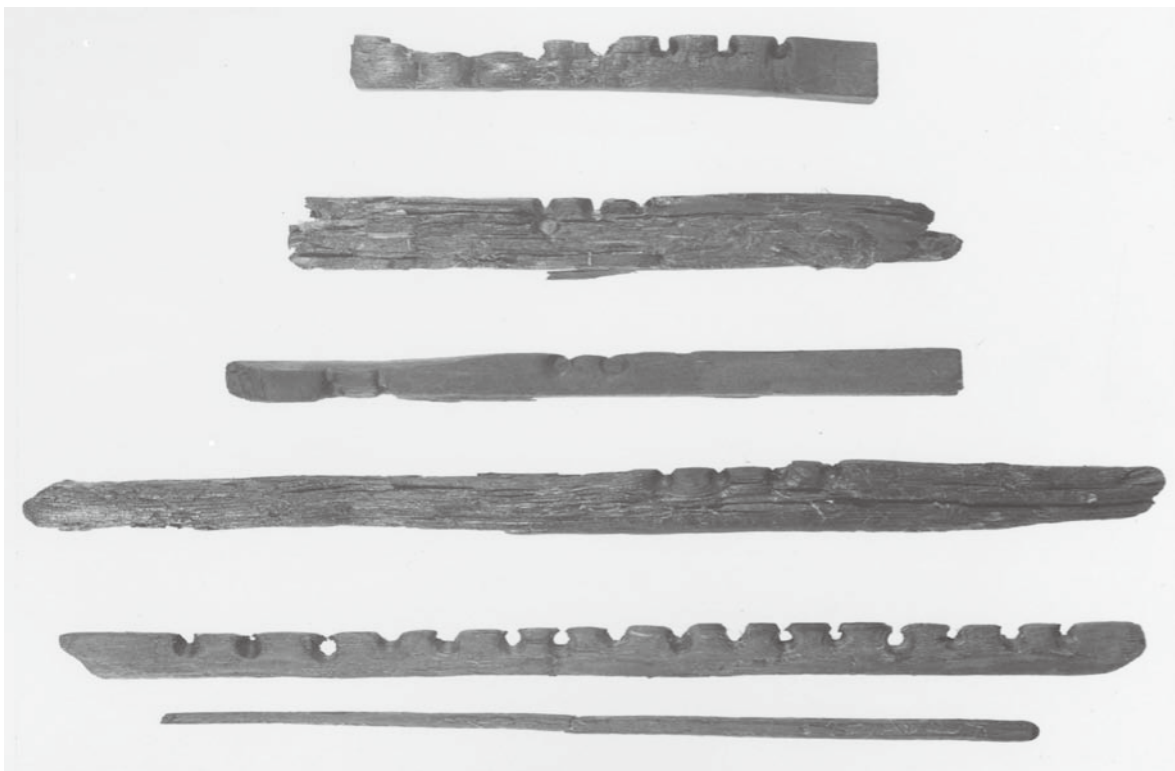


槽作りの琴

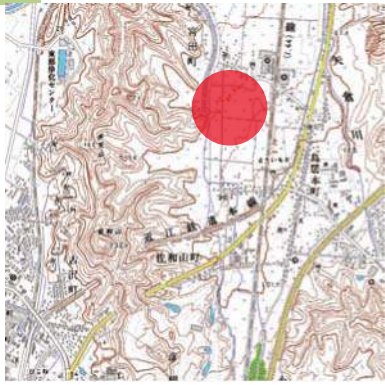
火鑽杵と火鑽臼については、火おこしの体験などで名前を聞いたことがあるかもしれません。木の棒と板を使って火をおこす道具には、こまの部分まいぎりが棒（火鑽杵）にスムーズな回転を伝えて火をおこす舞鑽つる、弓の弦ゆみぎりを棒にからませて回転させ火をおこす弓鑽もみぎりそして両手で棒を回転させて火をおこす揉鑽のなどがあります。その中でも、揉鑽は縄文時代から使われていたと考えられている火おこし道具です。森浜遺跡から出土したものは古墳時代初め頃の土器と一緒に見つかりました。

森浜遺跡から出土した火おこし道具は、おそらく揉鑽であろうと考えられます。火鑽杵は直径 1 cm くらいの細長い棒で、火鑽臼は細長い板です。板の端には丸く焦げた穴がたくさん連なっています。これが火をおこした跡なのです。切り込みを入れた丸い穴まさつねつに棒を当てて強く回転させると、摩擦熱で火種が出来ます。体験などでよく行われている舞鑽を使うと結構早く火がつくのですが、この揉鑽で行うと火がつくまで少し時間がかかります。

火は、日常生活のに使用されるだけでなく、不浄なものを燃やし尽くす神聖なものとして考えられていました。森浜遺跡から琴や火おこし道具が見つかったことは、琵琶湖の辺で祭祀を行っていた証と考えられるかもしれません。



火鑽道具（一番下が火鑽杵・他は火鑽臼）



## 湖と陸をつなぐ遺跡

### ろくたんだ 六反田遺跡 (彦根市宮田町)



遺跡周辺の復元図 (1/100,000 : 明治 28 年)

六反田遺跡は、平成19年から20年にかけて発掘調査を行いました。近江鉄道鳥居本駅の西側に位置し、北側には戦後の干拓事業で水田になっている入江内湖が広がっています。古代には小野川と矢倉川を下っていくと入江内湖にアクセスすることができました。そして、東側には江戸時代の中山道が通過しています。この江戸時代の中山道のルートは、そのまま古代の幹線道路東山道と重なるといわれています。つまり、六反田遺跡は古代の主要陸路であった東山道と入江内湖を通じて湖上路である琵琶湖にアクセスできる好立地にあったといえます。これが六反田遺跡の性格を決定

する大きな要因であったと考えられます。そして、このことは出土している遺物などから裏付けられました。

調査の結果、六反田遺跡は大きく2時期の遺構がみつかりました。飛鳥時代(7世紀後半)と平安時代初め(8世紀末から9世紀)です。みつかった遺構の中で注目されるのは、河川を拡幅したり、埋め立てたりして構築した護岸構造物の存在です。この構造物はおそらく船着き場のような用途が想定されます。また、護岸構造物がつくられている川からは当該時期の遺物がたくさん見つかっています。もともと川であったため木製の遺物の残りがよく、木製の食器や木簡、人形代、<sup>もっかん</sup> 斎串、<sup>いぐし</sup> 土馬<sup>どば</sup>など祭祀の道具が出土しています。また、木製品以外にも土器(須恵器や土師器)が見つかっています。これらの土器は当時の都(長岡京や平安京)で使われていたものと同様の規格のものがたくさんありました。そしてその中には<sup>ぼくしよ</sup> 墨書土器と呼ばれる墨で文字を書いたものや、<sup>てんようけん</sup> 転用硯と呼ばれる食器を硯として代用したものが含まれます。

出土した木簡は、文書木簡（役所の書類）・習書木簡（字の練習）・荷札木簡（荷物につける札）があります。そのうち、残りの良い荷札木簡には「税代 黒米五斗」と書かれていました。黒米とは玄米、五斗は当時の一俵を示しています。そのことからこの荷札は「古代の出挙という種<sup>たね</sup>籾を貸し出す制度の利子米として坂田郡の役所に収められた玄米一俵」と解釈できます。そして、木簡は最終目的地で廃棄されること、玄米は役人の食糧として使用されることが多いことから、玄米一俵が坂田郡の役所から出先機関に、施設運営用に運び出されたものであると推定できます。このことから、六反田遺跡が郡の出先機関であったことがわかります。

では、どのような機能を持った機関だったのでしょうか？それを解く鍵は、最初に触れた遺跡の立地にあります。

遺跡の立地する地域は、現在、J R 東海道本線・東海道新幹線・名神高速道路と日本列島の東西つなぐ基幹交通路が通過しています。古代においてこれらに相当する交通路が東山道です。また、遺跡の周辺を流れる矢倉川や小野川を下ると入江内湖、そして琵琶湖につながります。また、入江内湖の琵琶湖への出口には古代琵琶湖の主要な湊、朝妻湊<sup>あさつまみなと</sup>が想定されています。

施設を公的な機関が管理していることも考え合わせれば、六反田遺跡は立地を最大限に活かし、朝妻湊の機能を補完する陸路と湖上路のターミナルだったといえます。



荷札木簡  
(左：表 右：裏)



護岸構造物 (7世紀後半)



川跡から出土した人形代



川跡 (8世紀後半～9世紀)



## 水辺の祭祀

あかのいわん  
赤野井湾遺跡 (守山市山賀町)

赤野井湾遺跡は、これまでの発掘調査で縄文時代早期から現代にいたる数千年にもおよぶ人の活動の痕跡をとどめる湖底・湖岸遺跡であることが判明しています。平成22年度の発掘調査は、対象地はわずかに70㎡ほどでしたが、湖岸にほぼ並行して流れる河川跡を検出し、弥生時代中期から古墳時代の土器・石器・木器が多量に出土しました。

土器類はほとんど摩滅していないことから、弥生時代中期には、河川沿いに近接する赤野井浜遺跡や小津浜遺跡おづはまのような集落が営まれていたと考えられます。また、



▲小型丸底壺と手捏土器（手前の小さな2点）

この河川に重複して数十年前頃まで使われていた流路があることから、約2000年にわたって赤野井湾周辺の人々にとって変わらぬ景観であり、活動の場であったことがわかります。

古墳時代前期と呼ばれる4・5世紀頃の出土品は、甕・壺と言った日常品もありますが、小型丸底壺や甕・壺を模した手捏土器てづくねといった祭祀用の土器が多くあります。小型丸底壺の中には、羽根状の文様を刻みつけたものもあります。また、鏡を模した滑石製の有孔円板かつせき ゆうこうえんばんも1点出土しています。これらは、豊穰や再生、清浄の力を持つ水に願いを込め、湖岸や川岸などの水辺で行う祭祀さいしに用いられた道具です。



▲左上が碧玉製石釧、右下が滑石製有孔板

祀りの道具と言え、通常は副葬品として古墳に埋められる碧玉製腕飾りである石釧の破片が出土しています。赤野井湾遺跡の周辺には古墳はありませんから、古墳から流出したものは考えられません。近くの弘前遺跡こうまえからも石釧いしくしろが出土していて、この集落で製作していた可能性があることから、赤野井湾遺跡の石釧も製作地との関連性が高いと考えられます。



しおつこう  
**塩津港遺跡出土の漆碗の保存処理**

長浜市西浅井町所在の塩津港遺跡では、平安時代末の堀で区画された神社遺構がみつかったほか、出土遺物として神社の建築部材や木簡、神事に使用する幣串や土器、漆碗などの木製品が多数出土しました。

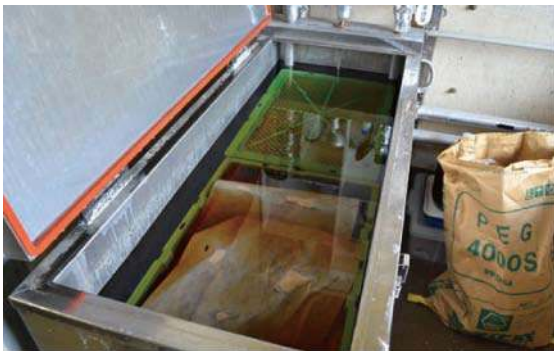
そのなかで漆碗は、木体が脆弱なために出土後に乾燥するなどして変化しやすいものです。そのためPEG含浸法による保存処理を実施しました。PEG含浸法とは、PEG(ポリエチン・グリコール)という合成樹脂を漆碗にしみこませて強化する方法で、処理後は安定した状態となり、保管や展示・活用などが容易となります。



1. 漆碗の出土状態



2. 漆碗の取り上げ



3. 漆碗の保存処理



4. 温湯による洗浄



5. 接合作業



6. 完成

# 整理中のその他の遺跡

## ■粟津湖底遺跡（大津市晴嵐）



粟津湖底遺跡は、縄文時代中期（約4,500年前頃）頃の我が国最大の淡水産貝塚として有名ですが、人々の痕跡を辿ると縄文時代早期（約6,000年前）にまで遡り、貝塚ではなくクリ塚を残しています。また、ひょうたんなどの種子やクリ・トチ・コナラなどの堅果類が出土しています。食材の煮炊きに使った押形文土器には、「おこげ」＝炭化物が厚く付着しています。この炭化物を分析すると、実際にどんな動植物を食材としていたかを探ることができます。

## ■北萱遺跡（草津市御倉町）



木製品の中での変わりダネは、幅1～2cm程度の桜の樹皮です。ぜんまいのように丸まっていたり、数本をまとめて縛ったものもあります。この桜皮は、綴じ紐として曲げ物製作の必需品です。曲げ物の底板やへぎ板が出土することは珍しくはありませんが、綴じ紐としての用途がわかるような状態で樹皮が出土することは珍しく、草津川流域の集落で曲げ物作りが行われていたようです。

## ■岡山城遺跡（近江八幡市牧町）



近江守護<sup>ろっかく</sup>六角氏の家臣である九里<sup>くのり</sup>氏によって16世紀初頭に、目の前にひろがる琵琶湖を意識して湖岸に面した頭山に築かれた城です。幕府内での権力抗争に敗れた11代将軍足利義澄がかくまわれた城で、ここで12代将軍となる義晴が誕生し、義澄は病死しています。発掘調査では、「将軍御座所」を裏付けるような御殿風の礎石建物や石垣、さらに<sup>とうみょう</sup>灯明皿や「式三献」に使用したと考えられる土師器の皿（かわらけ）が多量に出土しています。

## ■宇佐山古墳群（大津市神宮町）



写真は平安時代中期の蔵骨器（骨壺）です。須恵器の壺の口を欠きとって身とし、緑釉陶器の皿を蓋に使っています。緑釉陶器は9世紀末頃に京都でつくられたものです。

壺の中には、火葬された遺骨が残っていました。茶毘に付され蔵骨器をしつらえていることから、被葬者は庶民ではなく僧侶もしくは貴族層だろうと推測されます。骨の特徴から40～70歳代で死亡した男性で、只者でないほど頑健で骨太な人物であったようです。

## ■上御殿・天神畑遺跡（高島市安曇川町三尾里・鴨）



平成20年度から始まった発掘調査では、縄文時代から室町時代の墓や大型建物、倉庫、川跡などがみつかり、土器や石製品とともに玉類、鉄鉾石、柿経、鉄製馬具（轡）などが出土しました。遺跡近くを流れる鴨川の水運や、継体大王やその後の地域有力者層、地方官衙との関わりなど、高島地域の歴史を語る上で貴重な資料を整理調査中です。

## ■清滝寺・能仁寺遺跡（米原市清滝）



京極家の菩提寺「清瀧寺」は鎌倉時代中頃に建てられ、七百年余にわたって存続しています。平成20～23年度にかけて行った発掘調査では、この寺院に関わる室町時代後半から江戸時代前半の建物や五輪塔を転用した井戸などのほか、「仁」の文字の書かれた土器や木製品とともに京極高詮の「能仁寺」と推定される建物や庭園などの寺院跡がみつかりました。遺跡からはほかにも、武家の名門を偲ばせる輸入陶器・瓶子・香炉や、鉄釘、仏具等の金属製品がみつかりました。